

月と六ペンス

モーム著、土屋政雄訳

北海道大学経済学部経営学科 齋藤ひかる

結婚するなら、相手は平凡な人間がいいと思う。お互い尊重しあいひっそりと暮らして、子供が健康で、ささやかな幸せが手に入れば十分だ。何回も結婚をすることは世間的にはあんまりよろこばしいことではないだろうし、1回でキメたいところだ。そうして、自分を愛してくれる家族に見守られて死にたい。ありきたりな、世の中に無数にある地味な人生だ。この平穏で静かな生き方こそが手に入れられる可能性の高い、安定性のある幸せなのだと思う。誰しも、社会からつまはじきをされたくないし、周囲から認められたいという願望を持っている。だから、ストリックランド夫人が「夫が女と国外へ逃げ、妻と子供を捨てた」なんて話を聞いたとき、離婚は絶対にしないし戻ってきてくれればすべて水に流してやり直せると言ったのはもちろん、夫への愛情がまだ残っていたとか、子供のためとか、夫を虜にした女への嫉妬の表れとか、いろいろ理由はあると思うが一番もっともらしいと思うのが、ゴシップ沙汰が広まって自分を哀れんでほしくないという周囲の目を気にしたのではないだろうか（ただしストリックランド夫人の場合、同情によって社交界での地位が少し上がったと書かれており、なんてしたたかな人なんだ……！と感心したが）。このように、社会のルールに沿って外れないように気を付けながら平平凡凡な生活をしたと思うわたしたちに相對するのが、芸術家である。

そもそも、芸術とはなんたるか？というのとは常日頃疑問に感じていた。自動車学校の路上教習のルートの中にあり、よく横を通っていた札幌近代美術館にこの間行ってきたが、とても眠くなった。そのときは小谷博貞やシャガール、さらに北海道を題材にした写真展がやっていた。シャガールや写真はともかくとして、小谷博貞は抽象画が中心であったため（キュビズムなど）ガイドの方の話を聞いて再度見て回っても特に何も感想が出てこなかった。評価されている作品を見ても何も感じない、自分の鑑識眼のなさに幻滅した（もちろん、芸術に関する知識のなさもある）。平凡な人間は非凡な人間の才能に気付けないのだろうか。

さて、月と六ペンスのストリックランドやストループなどの芸術家はやはり常軌を逸した人物として描かれている。語り手である「私」が読者に近い性格であるため、なかなか理解のできなさが目立つように見える。どちらも、他人の意見、評価などまったく気にしていない。ストリックランドは絵を描くこと以外に価値を見出していないように見える。ストループはストリックランドやブランチにひどい仕打ちをされても、自分の眼を信じ愛情を注ぎ続ける。これは、「私」が冒頭で、「作者たる者は、創作の喜びと思案の重圧からの解放にのみ報酬を求めるべきであって、評判の良し悪しや売れ行きが多寡には無関心でいなければならない」（p.19）と述べており、この二人は真の芸術家なんだと納得する。生半かな人間には「ほんとうに」まわりの人にどう思われようがどうでもいいとは容易にはいえない。芸術家は、なろうと思ってなるものではなく、なるべくしてなるものなのだと思います。

若きウェルテルの悩み

ゲーテ著、竹山道雄訳 岩波文庫

北海道大学経済学部経営学科 齋藤ひかる

ゲーテは、「もし生涯に『ウェルテル』が自分のために書かれたと感じるような時期がないなら、その人は不幸だ」と述べた。こんなストーカー気質な主人公のどこら辺が理解できるのか？わかるわけがない！と思った。しかし、事実この「若きウェルテルの悩み」が1774年に出版されたときはヨーロッパに一大センセーションを巻き起こし、当時の若者はウェルテル熱にうなされ自殺をするものが絶えなかったという。恐ろしい時代だなど思うとともに、少しうらやましい。現代は、たった1冊の本が若者にそれくらいの影響を与えるなんてことは想像もつかない。

この本は、18世紀で盛んだった書簡体で書かれている。それによって、ウェルテルの愛するシャルロッテへの思いが第三者のフィルターを通ることなく、そのままぐさぐさと伝わってくる。その頃の時代の感覚として、「感情の命ずるがままに行為する人間のみが、自立し解放された人間である」(p.266) とはいえ、ウェルテルは周りの人間のことを考えていなさすぎではないかと思う。まず、婚約者のいるロッテのところへ毎日通い続ける点。友人とはいえ、ロッテにしても婚約者のアルベルトにしても二人の結婚生活に水を差すようなウェルテルの行為、存在は一般的に避けるべきであろう。ただし、ロッテにも罪はあるということは忘れてはならない。ウェルテルを遠ざけることをためらってしまったのは、最初は「心をこめたやさしいたわりから」(p.187) だったが、その後ウェルテルと様々なことを分かち合っただけで、「やっぱりウェルテルを自分のためにとっておきたい」(p.198) と思っていたのである。中途半端なやさしさは酷だ。しかし、自分を好いてくれている人を邪険に扱うのはとても難しいし、正直なところロッテのように考えてしまうのが素直な感情だろう。アルベルトは、ウェルテルいわく「彼はもっとも善良なもっとも高貴な人物であるらしい。いかなる点から見てもその人に及ばぬことを、私がいさぎよく自認するような人」(p.73) だという。子供っぽく一途に妻を好きなウェルテルと友人になってしまうようなちょっと常人には理解しがたい人物であるが、アルベルトは一貫して大人であるため、とても好きな登場人物である。

第二に、自殺してしまうところである。自殺に関しては、ウェルテルとアルベルトが議論をしている。アルベルトは自殺は馬鹿な、弱い人間のすることであると批判する。ウェルテルは自殺にいたった事情を理解すべきで、例外もあると述べている。これに関してもわたしはやはりアルベルト派である。どんな事情があろうとも、自ら死ぬことは逃げでしかない。逃げることは悪いことではないと思うが、生きている限り強くなれると信じている。そして最終的にウェルテルは自殺するが、これもまたひっそりと自殺をするならまだ

しも、ロッテにその旨の手紙を出して死ぬのだ。「人間が自己の存在を真に確認し、自己の現存をほんとうに印象づけることができる唯一の場所は、自分が愛するひとびとの追憶、その魂の中である」(p.103)とウェルテルは述べるが、それにしても、愛されて残されたロッテの気持ちは考えたことがあるのか?と問いたい。

しかし、ウェルテルは周りの人の気持ちは二の次にし、自分の感情を放出させて自由に生きた。これはやはり人間のあるべき姿として生きたことになり、とてもうらやましいと感じる。

風土

和辻哲郎著

北海道大学経済学部経営学科 齋藤ひかる

人間存在は歴史性と風土性という二重人格性を持つ、としながらもこの書では風土性に重きを置き「人間存在の構造契機としての風土性を明らかに」(p.3)している。「風土」冒頭の序言では抽象的な内容が書かれておりまったく理解できず果たして読了できるのだろうかと心が折れかけたが、第2章以降でモンスーン、沙漠、牧場と3つの種類の説明になってからはとても読みやすかった。非常に論理的で、さらにそれぞれの類型で記されていた特徴が対応する国のイメージと一致する部分が多く納得させられてしまい、終始「へえー」という感じであった。反論する点が一切見つからなかったのは、地理と世界史の知識が乏しく、さらに著者の和辻哲郎が示唆を受けたというハイデガーの思想も知らないままに読んだためだろう。その点は反省している。それにしても、やはり人間の地域別の生き方や文化、社会などを型にはめてみるのはとても面白いと思った。論理的根拠のある血液型別の性格診断のようなものではないだろうか。世の中いろんな人がいるのにたった4種類しかない血液型で性格を分けてしまうように、この書ではさらに少なく3種類に分けている(もっとも、モンスーン型は日本、インド、シナに、牧場型はイタリア、ギリシア、ローマ、西欧に分けて述べられているが)。こういうものは、分かる分かる!と納得しながらもちょっと当てはまらなくて突っ込みどころがあるくらいがさらに盛り上がると聞いたことがあるし、1931年にこの書が発売されてから80年以上もの間、いろんな観点からの批判を受けつつ広く読まれ続けている理由もこういうことなのかな?と考察した。

日本に住んでいて四季があるのは当たり前で、春夏秋冬それぞれ好きなのところも耐え難いところもある。東京での春は気温がとにかくちょうどよく桜もきれいに咲くのだが、スギの花粉症に悩まされるのでとてもつらい。夏は外で立っているだけで汗が出てきて、さらに梅雨や台風で蒸し暑さがある。秋は紅葉を見られたと思ったら急激に冷え込み、冬は乾燥と突き刺すような寒さに見舞われる(北海道ではスギの花粉症や梅雨や台風がなく夏は暑すぎないというよいところもありつつ、冬の、ここは本当に日本ののだろうか……と

疑いたくなるような豪雪があり心が折れそうになる)。こういうめまぐるしい気候の変化は当たり前だと思っていたし、ヨーロッパも大体おんなじようなものだろうという認識だったが全然違って驚いた。なんでも、大雨、豪雨が稀有で湿気があんまりないのだという。特にギリシアでは「真昼」と言われているように空気に湿気を含まないのだ。陰鬱と言われる西欧でも、それはじめじめした湿っぽいものではなく日光が乏しいことによる陰鬱だそうだ。雨が降ったり、梅雨の時期だったりすることで湿気が多いとなんだか頭痛がしてくるし髪の毛は思い通りにならないし、こんなヨーロッパの風土はほんとうにうらやましい！と思った。しかし「我々にかかる風土に生まれたという宿命の意義を悟り、それを愛してなくてはならぬ。(中略)それを止揚しつつ生かせることによって他国民のなし得ざる特殊なものを人類の文化に貢献することはできるであろう」(p.303)と和辻は述べている。この言葉がすべてだと思った。日本の風土を客観視しつつ、他の地域の風土にも向けられるといいと思う。